

国際交流情報



大学美術教育学会国際交流委員会
2011年 7月27日(水)

第5号

発行：藤江 充〔理事長／愛知教育大学〕
編集：山口喜雄〔委員長／宇都宮大学〕

新旧InSEAアジア地区評議員意見交流

暑中お見舞い申し上げます。東日本大震災でご自身あるいはご家族が被災された皆様、いかがお過ごしですか。また、日常生活の大変さを越えて被災地支援に奮闘されている皆様に心から敬意を表します。

第5号特集は、「新旧InSEAアジア地区評議員意見交流」です。InSEA (International Society for Education Through Art／国際美術教育学会)で、大学美術教育学会とは別組織ですが、その存在と活動は日本ならびに世界における美術教育の発展に寄与してきました。

ちなみに過去20年間のアジア地区評議員は早い順に、1994年まで村上暁郎(武蔵野美術大学・当時)、以後は仲瀬律久(聖徳大学)、岡崎昭夫(筑波大学)、福本謹一(兵庫教育大学)の各氏が歴任し、2011年6月に池内慈朗(埼玉大学)氏が新たに選任されました。

うち本委員会メンバーの仲瀬・福本・池内の3氏が選任された経緯から、「抱負・エール・期待」を本号に執筆していただきました。

是非ともご高読の上、執筆者や本誌へご感想・ご意見・ご要望をお寄せください。



InSEAアジア地区 評議員就任の 挨拶と抱負

■ 池内慈朗 埼玉大学

(InSEAアジア地区評議員／国際交流委員)

このたび、InSEA評議員(World Councilor in Asia)を仰せつかり、責任の重さを痛感しております。ご支持して頂き、誠にありがとうございました。InSEAアジア地区評議員に選出されましたのも皆様のおかげとっております。

さて、震災時には各国のInSEA代表からのお見舞いが、福本謹一先生と私のところに寄せられました。InSEA会長のリタ・アーウィン先生をはじめ、世界各国の美術教育研究者からの心あたたまるお見舞いは、誠に有り難い思いでした。

私とInSEAとの関わりを少し、述べさせて頂き

ます。1994年に会員となり、翌年のInSEA Newsに「Culture of being “cute(Kawaii)” かわいい日本の文化 (Vol.2 Number2,1995)」というかわいものに対しての日本人の美意識を論じた文章を発表しました。青山学院女子短期大学でアジア地区東京大会が開かれた1998年当時、青山学院初等部図画工作科の講師をしていた関係で、大坪圭輔先生のもと準備段階から、研究局・渉外局でお手伝いさせて頂きました。毎月の準備会、発表レジメの翻訳なども今では良い思い出で、そこで出会った多くの先生方には、ながきにわたり私を叱咤激励して頂きました。忘れがたい若き日の一頁といえます。東京大会中は忙しいとはいえ、海外の美術教育研究者たちとの交流は根っから好きということもあり、やりがいのあることばかりでした。学会は、それぞれの個性が集まっているので、適材適所という考えでは、現在も本学会の国際交流委員会に所属させて頂いていることに幸せを感じます。

私は大学美術教育学会、美術科教育学会、日本

美術教育連合の会員です。したがって、大学美術教育学会理事長の藤江充先生、美術科教育学会代表理事の金子一夫先生、日本美術教育連合理事長の宮坂元裕先生をはじめとして多くの方々にサポートをお願いし、学会等の垣根を超えて国際的に日本をまとめていくことが大切と考えております。また、3学会等以外でも、全国造形教育連盟その他、全国の組織や個人に対して、InSEAについて啓蒙したり、会員になることの重要性を訴えたりするなど、かなりのリーダーシップを発揮して行くことが求められると思います。またInSEA国際会議での情報や、InSEAで問題とされていることなどを日本の皆様にお伝えすることも重要と考えております。



InSEA評議員 (アジア地区) 池内先生へのエール

■ 福本 謹一 兵庫教育大学
(前InSEAアジア地区評議員／前国際交流委員)

私がInSEA世界大会に参加したのは、1993年のモントリオール大会から。当時、日本からは評議員であった現聖徳大学の仲瀬先生、愛知教育大学の藤江先生、岡山大学の仁井先生・赤木先生他多数の先生方が参加されていた。その後、1999年のブリスベン大会に和歌山大学の永守先生や奈良教育大学の宇田先生といっしょに参加して発表を行った。その後仲瀬先生、筑波大学の岡崎先生に推挙されて2002年のニューヨーク大会から評議員に選出された。同大会には、横浜国立大学の宮坂先生、大阪教育大学の岩崎先生他多数が参加し、「9.11」の影響の残るやや暗い世相の中での大会を盛り上げる一助となった。それからの9年間を評議員として務めさせていただいたが、大阪芸術大学の花篤先生、聖徳大学の遠藤先生他多数の先生方のお蔭で2008年の大阪大会を無事終了することができた。国際化対応があちらこちらで叫ばれる中で、美術教育の国際化をどう進めていくのかについては課題も多いが、こうした関わりやつながりがその下支えをすることは間違いない。

2011年の第33回InSEA世界大会は、ハンガリー

今後、出来る限り国際会議にも日本代表として出席したいと思っています。東日本大震災以降、関東圏を含む東日本の大学では休講も許されず、補講の1コマ確保さえ難しい状況です。夏期に電力需要が高まり計画停電が予想されます。また、本学を含む関東圏の国立大学法人は夏期の授業指針により、大口利用者であるため15%の電力削減が要求され、試験を含め7月中旬までに授業の終了が課せられました。そのため、前期の集中講義を6月の土・日曜に集中開講という状況でした。このような非常時でしたので、2011年6月25日からハンガリー・ブダペストにて開催の第33回InSEA世界会議への参加は不可能となり、誠に遺憾に思っています。

のブダペストで開催され、池内氏が新評議員の一人として選出された。美術教育の国際的な交流機会を唯一保証するInSEAが日本の美術教育者にとってどのような意味があるのかを再考する時期でもあるだろうが、世界的な文脈では、ユネスコが2006年に第1回芸術教育世界会議（ポルトガル、リスボン）、2010年には韓国のソウルで第2回世界会議を開催して、芸術教育を学校教育の中に確固たる地歩を築くようにと各国政府に働きかけている。3月11日の東日本大震災後には、InSEAやUNESCOの多くの役員や会員から国内会員の安否を気遣う声と日本に対する支援の呼びかけが寄せられた。国内でも美術教育者たちがネット等を通じて被災地にどういった支援ができるのかを真剣に討議しているが、国際的なつながり合いも美術教育という一分野の特性を活かした支援の形を模索するだけでなく、それ以前に世界市民としての共感的な輪の拡がりこそがInSEAの究極の目的でもある美術を通して世界平和へ寄与することを実現することにつながるはずである。南米の民話に基づく「ハチドリの一とすずく」という道徳教材があるが、そこに登場するクリキンディのけなげな姿は、美術教育が現代社会の混迷や諸課題を解決するのにどのような貢献をすべきかを考える起点にもなるだろう。

池内新理事には、日本という枠組みでの美術教育の情報発信を担っていただくことはもちろんであるが、より大きな枠組みの中での美術教育の存在価値を再考して、世界との接点を広げていただくことを期待している。



次期InSEA アジア地区評議員 への期待と励まし

■ 仲瀬律久 聖徳大学

(元InSEAアジア地区評議員／国際交流委員)

InSEAのアジア地区評議員 (World Councilor in Asia) は、アジア地区代表であると共に、日本代表であるという自負の念を持って責任ある行動とることが大切だと思います。InSEAの国内会員を増やしたり、大学美術教育学会の年次大会や国際交流委員会に必要な要望に応じて可能な限り出席したり、海外における最新の国際的な美術教育情報を伝えることも是非やってもらいたいですし、国内の美術教育の情報をよく理解して海外に伝達するという橋渡しの役割も果たしてもらいたいです。

特に、他のアジア地区の評議員たち (Regional Councilors: 韓国・台湾) と緊密に連絡し協力し合って、世界におけるアジアの美術教育の現状、特性などを他の国々の美術教育者にも理解してもらうように努めることもお願いしたいです。

最近、わが国では教育環境が大変厳しくなり、

大学をはじめとして教育現場では国内であっても気軽に出張が出来ない状況になっていて、海外出張も従来様には行かないという状態です。したがって、以前のように評議員が音頭を取って会員を募り、世界会議に参加するということがなかなか難しくなっています。そのような中で、これらの困難をどのように克服し、InSEAの評議員として国際舞台で活躍するのが期待されることです。

ところが、評議員になっても、どこからも財政的な支援があるわけではありません。私の場合も、職場で許されている研究旅費は微々たるものだったので、それを使い切れば後は全部自己負担でした。それでも、何とか評議員としての責任を果たせたのは家族の理解と同僚などの協力と励ましがあったからでした。何とか、公的な支援を得たいと思って科研費などを申請し財源を確保したこともありました。

さらに近年、大学では授業時数の確保が厳しく要請され、休講することにも大変神経を使います。したがって、国外において開催される会議への出席要請が来ても、出張がなかなか大変だと思いますが、頑張ってください。心からの声援を惜しみません。

ぜひ、健康に留意して世界の美術教育のために貢献してほしいものです。

『美術教育のアーカイビング & ライティングリサーチ2011』 【英日対訳】 科研報告書刊行



■ 山口喜雄 宇都宮大学 (国際交流委員長)

全200頁の本書は、平成19～22年度科学研究費補助金基盤研究A「美術教育文献のアーカイビングに関する発展的研究」実績報告書Ⅱ【課題番号19203036】である。アーカイブ (archive) とは複数のファイルを一つにまとめたもの、アーカイブス (archives) とは公文書・公的記録、アーカイビング (archiving) とは国際的に現在進行しているアーカイブ化をさす。本書名の「アーカイビング」は、報告に値する様々な試みがなされている欧米の代表的美術館を訪問しての教育普及担当者への面談調査を集約した報告文と関連のグラビア写真である。ちなみに、人口の4%12万人へのスチューデントプログラムを行うシカゴ美術館、イメージライブラリーで美術教育文献アーカイブを展開するメトロポリタン美術館、年間に教育普及対象の2000団体に対応しているバチカン美術館、「美術教育重視の始原は1789年のフランス革命」との沿革を誇りに豊かな教育普及活動を実施するルー

ブル美術館、2006年以降「子どものための美術館」づくりを急ピッチに進めているピカソ美術館、大学との連携を生かしたコートールド協会美術館、美術館教育普及活動を多彩で具体的に提示してくれたゴッホ美術館等々である。また、「ライティングリサーチ」の正式名は「美術教育 論文・実践報告ライティングリサーチ」で、学術論文や教育実践報告をめぐる疑問を各執筆者の実体験に基づいて論述した内容である。研究分担者の藤澤英昭・柴田和豊・天形健・春日明夫・福本謹一・永守基樹・新関伸也の各氏、研究協力者の長谷川哲哉・小橋暁子・島田佳枝・上野美津穂・西尾正寛・山田芳明・山木朝彦の各氏が執筆している。

先着10部を希望者に無料送付します。メールで見出しに「■ 科研報告書希望：氏名」と記し、「①氏名、②所属、③送付先〒・住所、④確認可能な電話番号、⑤eメールアドレス」を本文に書いて、nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp 山口喜雄宛に送信願います。送付に数週間かかる場合があります。

■ 平成23年度 第1回国際交流委員会報告



日時：2011年6月19日（日）13：00～14：00

場所：東京文化会館（上野）4階会議室

出席：6名/全12名、左手前から煤孫・甲田・山口・竹内・鈴木・結城の各委員

議事：次の4点について協議し、決定した。〔註：事前に全委員へのメールで議事の委任を了承〕

1) 平成22・23年度事務局の引継

①平成22年度事務局の煤孫康二・竹内とも子両委員より口頭報告。②平成23年度事務局に鈴木幹雄・甲田小知代両委員の選出。③平成24年度事務局策定に関する協議。④福田・金子両委員の平成22年度末退任希望を承認。

2) 平成23年度国際交流委員会活動内容の協議

①第33回InSEA世界大会2011の情報収集と告知。

②諸外国美術教育状況の視察：当面、中国側の事情で中国内陸部視察旅行は中止。安東恭一郎・鈴木幹雄両委員で韓国美術教育状況調査を検討し、計画を立案する。③科研申請を煤孫康二・山口喜雄両委員で検討し、可能な場合は申請する。

3) 『国際交流情報第5・6号』編集内容の検討

①『第5号』の特集は、「新旧InSEAアジア地区評議員意見交流」とする。②『第6号』の特集は、現在検討が進められている韓国美術教育学会との協定更改関連記事、長田謙一委員の最新研究報告、煤孫委員のニュージーランド支援プロジェクト、甲田委員のフィンランドのアートスクール最新情報、鈴木委員のシュトゥットガルトの美術界レポート、山口委員の欧米美術館教育普及の最新レポート等々を検討し、設定する。

4) 本委員退任後の「連携協力者」新設の検討

①検討の理由：本学会内外の役職等の事情で本委員退任により、本委員会として従前の各国対応が継続されなくなることを防止する。②対象者：平成22年度で退任の福田隆真（山口大学）・金子宜正（高知大学）の両氏、それ以前に退任された福本謹一（兵庫教育大学）・中村和世（広島大学）の両氏。詳細や各氏への依頼は『第5号』刊行以降とする。

5) 他：委員への交通費は特急券なしの半額受給。

〔※鈴木・甲田両委員の記録を基に山口が記載〕

■ 国際交流情報編集後記 ■

■ 休む間もなく勤務・研究活動の池内・福本・仲瀬の各委員には短時間で玉稿を送信していただき、ありがとうございました。

■ 岩手で被災の煤孫委員、神戸・新潟から高額旅費自己負担の鈴木・甲田委員、週末も休まず出席の竹内・結城委員に感謝。

■ 宇都宮大学は福島原発から140キロでも放射能への不安が続く。安全確保の留意とともに、美術教育がこの時代に何ができるか、『国際交流情報』でも探っていきたい。

■ 第1回委員会報告に記したように、次号も興味深い記事を掲載できるよう祈念。各自にとって充実の夏期となりますように。

山口喜雄：宇都宮大学(2011年初夏)
nobuoya@cc.utsunomiya-u.ac.jp